



TITLE:

純正現象學の方法論及び問題論(フッサールの現象學七)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 純正現象學の方法論及び問題論(フッサールの現象學七). 經濟論叢 1926, 22(2): 264-284

ISSUE DATE:

1926-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128373>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第

卷二十二第

行發日一月二年五十正大

論叢

國際課税の主義論争……………法學博士 神戸 正雄

單一税の實現性……………法學士 汐見 三郎

純正現象學の方法論及び問題論……………文學博士 米田 庄太郎

萬民經濟交通の發展……………法學士 作田 莊一

時論

勞働爭議調停法案に就て……………法學博士 河田 嗣郎

說苑

露國金融制度の變遷……………經濟學士 谷口 吉彦

スミスの植民地觀に關して……………法學博士 山本 美越乃

再び矢内原教授に應ふ……………

雜錄

神社救貧制度の一例……………經濟學士 黒 正 巖

法令

營利職業紹介所事業規則……………

(禁轉載)

純正現象學の方法論及び問題論

(フツサールの現象學七)

米田庄太郎

A 方法的豫備考察

B 純粹意識の一般的構造

第二十一卷六號掲載

C ノエジスとノエマ

D ノエジ斯的ノエマ的構造の問題論に就て

本號掲載

(C) ノエジスとノエマ (Noesis und Noema) 夫れ總ての志向的體驗は其のノエジスの諸要素によ

りて、まさしくノエジスの體驗である。そうして一の「意義」及び場合によりては多樣的意義の如き或物を夫れ自身の中に包藏し、此等の意義給附に基き、又是れと一致して、是れによりてまさしく「有意義的」となる處の諸作業を成就するのが、即ち志向的體驗の本質である。 かかるノエジスの諸要素

素とは、例へば純粹自我によりて、意義給附の力に従ふて「考へられたる」對象の上に、純粹自我の注視を向けること、更に此の對象を(注視が考へること)或は「意味すること」の中に現はれたる他の對象の上に向けられて居る間に、把握し確持することや、

其の他解釋すること、結び附けること、一緒に攝むことや、信仰、推測、評價其他の種々なる態度を執ることなどの如き諸作業である。總て此等の事は夫れ夫れ當面の諸體驗（如何に構造が相異なり、又夫れ自身に於て變化し得るとき）に於て見出さる可きである。又此の實例的諸要素の一例が、如何に體驗の實在的構成成分を表示するとは云へ、しかも亦意義と云ふ稱號によりて實在的でないものを指示する。

何處にありても、實在的ノエジスの内容の多様な與料に對應して、眞に純粹なる直覺に於て

舉示し得られる多様な與料が、相關的なるノエマ的内容、或は簡單にノエマ (eine korrelativer

noematischer Gehalt, oder kurzweg das Noema) に於て存在する。

例へば知覺は其知覺意義の奥底に於て其ノエマ、即ちあるがまゝの知覺さ

れたるものを有する。同じく何れの場合の記憶も、其のあるがまゝに記憶されたるもの（夫れが記憶に於て「考へられたるもの」意識されたるものである通りに）を、其のノエマとして有する。又判斷は判斷されたるものがあるがまゝに其のノエマとして有する。何處にありてもノエマ的相關者（此處では甚だ廣い意味に於て「意識と稱せられるものは、夫れが知覺、判斷、感情等の體驗に於て內在的に存在するがまゝに、即ち我々が純粹に此の體驗其物を問題とする時に、夫れによりて我々に呈出されるがまゝに解せしむる可きものである」）

先づ知覺に就て云へば、「あるがまゝの知覺されたるもの」が知覺ノエマにして、吾人は之を忠

實に、完全なる明證に於て記述し、言表することが出来る。そうしてかゝる記述的言表、即ちノ

エマ的言表は、實在的言表と符合し得るに拘らず、根本的に意味を異にするものである。例へば

實在的言表に於ける本は、燃ゆることが出来るし、又吾人は之を化學的元素に分析することが出

来る。併しノエマ的言表に於けるあるがまゝの知覺されたる本（知覺意義としての本、知覺に不

可離的に屬するもの、木知覺の意義、必然的に木知覺の本質に屬するもの）、即ち木知覺のノエマ

は燃ゆることが出来ないし、全く化學的元素も、物理的力も、實在的屬性も有しない。そうして

知覺に就て立言せる事は、志向的體驗の總ての種類に適用される。例へば吾人は記憶に於ては、還元の後にあるがまゝの記憶されたるもの、豫期に於てはあるがまゝの豫期されたるもの、空想に於てはあるがまゝの空想されたるものを見出すのである。此等の體驗の各々に、一のノエマ的意義が内住する。そうして此のノエマ的意義は、種々なる體驗に於て相類するもの、否な場合によりは其の中核成分に於て本質的に同様なるものであつても、類の異なる體驗に於ては常に異なるもの、又夫れが共同的なるものである場合でも、少なくとも異なる仕方で特質附けられて居る。例へば吾人は知覺、想像、記憶等に於て、一の花咲ける木を取扱ひ、そうして其の花咲く木は何れの場合に於ても、同様なる言表に於て記述されて居るとするも、しかも其のノエマ的相關者は、知覺、想像、記憶等に對して、夫れ夫れ異つて居る。夫れは知覺の場合に於ては生々する現實として、想像の場合に於ては假作物として、記憶の場合に於ては記憶として特質附けられて居る。そうして吾人があるがまゝの知覺されたるもの、記憶されたるもの等に於て、即ち知覺意義、想像意義、記憶意義に於て、不可離的なものとして、又ノエジス的體驗の夫れ夫れの種類に、相關關係に於て、必然的に屬するものとして觀視するのは、其等の諸特質である。右に述べし處によりて、我々は完全なるノエマ内に於て、一の中心的中核、純對象的意義(上の例に就て云へば、何れの場合にも同一的客觀的言表に於て記述し得られるもの)の周圍に集める處の、本質的に相異なる諸層を區別せねばならぬことを認める。そうして我々は更に進んで意識領域に於て或物を注視し、最主要的な意識様式或は仕方(就て、ノエジス的ノエマ的構造を究明せんとするのであるが、夫れに於て我々はノエジスとノエマとの間の根本的相關が、完全に行はれて居ることを順次に確かめることが出来るのである)。

此處に吾人が更に注目す可き重要な意識變化の一種がある。是れ我々がノエジス的及びノエマ的關係に於ける注意的變更(die attentionale Wandlungen in noetischer und noematischer Hinsicht)とははんとするものである。夫れはつまり一定の觀念的に可能なる諸變更、即ち一のノエジス中核、及び之れに必然的に屬する處の異なる類の特質附ける諸要素を前定し、所屬のノエマ的作

業を根本的には變化しないが、しかもノエジスの方面に於ても亦ノエマの方面に於ても、全體験の變更を表示するものである。純粹自我の眼光は時としては此のノエジス層、時としてはかのノエジス層を、或は(例は記憶の記憶に於ける如く)時としては此の、時としてはかの重箱階段を貫通し、時としては直線的に、時としては屈折的に貫通する。可能的ノエゼン或はノエジスの諸事物の與へられたる全範域内に於て、我々は時としては一全體(例へは知覺的に現在する木)を、時としては其の何れかの一部分及び一要素を、更に又附近のものを、或は多形的なる結合及び過程を注視する。我々は突然想ひ起される記憶に眼光を投じ、我々の眼光は知覺ノエゼを通して進まずして、記憶ノエゼを通して記憶世界に進入し、其の世界を彷徨し、他の階段の記憶に移り、或は想像の世界に移る。そうしてかくの如き純粹自我の注意的變更によりて、ノエジスの方面に於て、更に又ノエマの方面に於て、種々なる變更が行はれるのである。此處では簡便の爲めに、知覺世界に止りて考へるが、我々は一の知覺的に意識されたる物或は物的過程を、其のノエマ的内容に關して觀念に於て固定するとする。此の場合には此の觀念に於て、注意的光線が又夫れに屬する一定の變更に應じて固定する。是れ注意的光線も亦一の體驗要素であるからである。されば固定されたる體驗の一定の變化の仕方

我々が「注意及び其の様式の配分に於ける單純なる變化」と稱するものが、可能であることは明らかである。そうして此の際に、體驗のノエマ的事態は、同じ對象性が常にと存在するとして特

質附けられると云はれ得る以上、同一不變に存続することが明白である。要するに右の變化は、つまりノエジスと平行するノエマ的諸成分を引き出し、相比較しつゝ、一の比較の場合には此の成分、他の比較の場合にはかの成分が選出されると云ふこと、或は同一の成分が時としては第一次的に注意されたるもの、時としては只第二次的に注意されたるもの、更に時としては只僅かに他の成分と共に注意されたるもの(全く「注意されない」のでない場合に)であると云ふことに於て、成立するのである。其等のものはまさしく、特にあるがまゝの注意に屬する處の種々なる様式である。そうして此の際に其等の現在性諸様式の部類は、非現在性の様式、吾人が率直に不注意と稱するものから區別される。

他方に於ては、其等の諸變更は管にノエジスの方面に於ける體驗其物の變化であるだけでなく、更に其のノエマにも及ぶ、即ち其等の諸變更はノエマ的方面に於ても、(自同的ノエマ中核を傷けることなしに)、特質附けの一の特別な種類を表示する。要するに注意の照明の變化は、顯現するもの、即ちノエマ中核を其の特有の意義方面に於て變化するのではなく、其の顯現の仕方を變化するのである。つまり此處では自同的なもの、所與性の仕方 of 必然的諸様式が、取扱はれるのである。

併し更に詳しく考察すると、此の場合の眞實事態は、當面の様式に於て注意的に特質附けられ

たる全ノエマ的内容、云は、注意的中核は、任意な注意的變化に對して、一の恒久的に固持さる可きものであると云ふことでなくして、寧ろノエジスの方面から見て、左の如き事項が指示されて居るのである。即ち一定の諸ノエジスは注意の諸様式によりて殊に積極的注意によりて、必然的に或は其の定まれる可能性に従ふて、制約されて居ると云ふことである。一切の「作用遂行」、「現實的態度」は、自我が對立して一定の態度をとる處のものに、積極的注意が向けられて居ると云ふことを前定するのである。併し此の事は緊張空間を擴め又狹める自我の注視の此の機能は、相關的なるノエジスの及びノエマ的變更の一の特異なる次元を意味すると云ふことを、毫も變じないのである。

注意的諸形成は其の現在性諸様式に於て、著しく主觀性の性質を帶び、隨ふて其等の様式によりて制約される一切の諸機能は、矢張り同じ性質を獲得するのである。注意する光りは純粹自我から發出して對象に向ひ、對象に於て終るか、又は對象から轉ずる。其の光りは自我から離れるのでなく、自我夫れ自身であり、自我光りとして存続する。そうして目的物或は對象は、其の光りに襲はれるもの、只自我との關係に於てのみ定置されるが、しかも夫れ自身は主觀的でない處の目標點である。夫れ自身の中に自我光りを運載する態度は、自我自身の作用にして、云は、自我はかゝる作用の中に生きて居る。そうして此の生命は一の内容流に於ける何等の「内容」の實在

をも意味するのでなく、「我思ふ」の一般的様式を有する一定の志向的諸體驗に於て、純粹自我があるがまゝの「自由なる本質」として「生動する處の、記述し得られる諸様式或は諸仕方」の多様を意味するのである。但し「自由なる本質」と云ふ語は、自分外に自由に出て行くこと或は自分に歸ること、自發的な行動、對象から或物を學ぶこと、感受すること等の如き生活諸様式を云ひ表はすに外ならぬ。自我光りの外に、或は體驗流に於ける「我思ふ」の外に行はれるものは、自我現在性の外に存するのであるが、しかも自我の自由作用に對する可能性或は將成態の分野である以上、矢張り自我從屬性を有するのである。

我々は更に「高等なる」意識領域の構造を考究したいと思ふが、其等の領域にありては一の具體的體驗の統一内に於て、幾多のノエジスが相重り合ふて組み立てられて居り、そうしてまさしく夫れに應じて、ノエマ的相關者が建設されて居るのである。蓋し特殊的に附屬するノエマ的要素を有せざるノエジ斯的要素は、一も存在しないと云ふは、何處に於ても行はれる本質法則であるからである。

今高等なる諸階段の諸ノエジスにありても亦、ノエマ的事態に於て先づ著しく出現する一の中心的中核(あるがまゝの意味されたる客觀性)が現はれる。此の場合にも亦、此の中心的ノエマは夫れがまさしくノエマ(あるがまゝの意識されたるもの)である處の、其の變化されたる客觀的事

たる客觀的事態に於て認知されねばならぬ。次に吾人は此處にも亦、此の新しく形成されたる客觀性（と云ふは變化されたるがまゝに認知されたる客觀的或は對象的なものは、例へば夫れに「する我々の學的研」は、夫れが當面のノエジスの體驗或は體驗形成の完全ノエマに於て意識される處の、其の所與性の諸仕方、其の「諸特性」、其の種々なる諸様式を有するのを見る。そうして云ふまでもなく、此處にも亦再びノエマに於ける一切の區別に對應して、變化されない客觀性に於て之れと平行するものが存立せねばならないのである。

夫れより更に、詳細なる現象學的研究の仕事は、一定の形成（例へば知覺）の變化する諸特殊化の如何なる諸ノエマが、まさしく其の形成によりて、又分化的諸特殊化によりて本質法則的に結合されて居るかを、確定することである。此の結合は徹底的に行はれるものにして、本質範域に於ては如何なる偶然も存せず、總てが本質關係によりて結び附けられて居る、殊にノエジスとノエマとはそうである。

此處に判斷範域に於けるノエジスとノエマとの區別及び關係を、實例として考へて見る。判斷作用のノエマは「あるがまゝの判斷されたもの」(Das Geurteilte als solches)である。そうして完全ノエマを把握する爲めには、夫れが具體的判斷に於て意識される處の、完全なるノエマ的具體化に於て現實的に認知されねばならぬ。此處に判斷されたるものと評定されたものとが混同されてはならぬ。判斷が一の知覺或は其の他の直接に設定する表象作用に基いて立てられた時には、表象作用のノエマは判斷の完全具體化の中に入り、判斷内に於て一定の形式をとる。即ち表象されたるものが其の儘で文章的主格或は賓格の形式をとる。此等の「夫れに就ての對象」殊に主格對象は評定されたるものである。そうして其等の評定されたるものから作られた全體、判斷されたる或物全體は、判斷體驗の完全なるノエマ的相關者即ち最廣義の「意義」を成すのである。

併し此の場合に、現象學的還元を忘れてはならぬ。夫れは我々が我々の判斷體驗の純粹ノエマを獲得せんと欲する以上、判決宣告を包括せんことを要求するのである。そうして現象學的還元を行なふと、判斷體驗の完全具體的本質、或は本質として具體的に把握されたる判斷ノエジスと、之れに従屬し、又之れと必然的に一致する判斷ノエマとが、現象學的純粹性に於て相對立するのである。要するに判斷體驗に於てはノエジスとノエマとの兩方面は根本的に區別されねばならぬ。併し後者は前者に相對立的に従屬するのである。そうして右に述べしことは、又他のノエジスの體驗に當てはまるので、例へば斷定的確實として、判斷と本質的類縁を有する總てのノエジスの體驗に對しては、夫れは自明的である。尙ほ更に、感情範域及び意志範域、好き嫌ひ、一切の評価、願望、決心、行動等の諸體驗に對しても、ノエジスとノエマとの區別、及び夫れに關して上に述べし事は、當てはまるのである。要するに總て其等のものは、幾多の志向的諸層を有する處のノエジス的なる、又之れに對應するノエマ的なる體驗である。

ノエジスとノエマとの一般的區別は、右に述べしが如きものであるが、此の兩者の區別をよく理解し把握することは、現象學に對して最大重要事にして、實に其の正當なる基礎附けに對しては、まさしく決定的なるものである。そうして是れより更にノエジスのノエマ的構造の諸問題に就て簡単に説述し、以て現象學特有の重要問題は如何なるものであるかを示すこととする。

(D) ノエジスのノエマ的構造の問題論に就て (Zur Problematik der noetisch-noematischer Struktur)
先ず體驗の現實的及び志向的分拆から始める。そうして便宜の爲め、最低階段のノエジス體驗の
一、即ち感覺的知覺に就て考へる

今純粹體驗としての知覺を分拆すると、先づ其現實的體驗要素或は成分としての質料的要素或は成分と、其の非現實的體驗要素或は成分としてのノエマ的要素或は成分とが、區別される。そうして現象學的 元を完成すると、一の知覺に於ける特定の對象は、夫れが知覺に於て顯現するが如くに客觀的に規定されたものとしては、只其の質料的要素がまさしく其の如くに

あり、決して夫れと異なつて居ない時のみ、顯現し得るものなることが、一般的本質的に洞見される。かくて知覺の質料的内容の各變化は、まさしく知覺意識を惹起しなくとも、少なくとも、顯現するものは客觀的に他のものとなつて云ふ結果を生じなければならぬ。そうして此處に「統一性」と「多様性」とは、全く相異なる次元に屬すること、及び一切の質料的なるものは現實的成分として具體的體驗に屬し、之れに反して其の中に多様のなるものとして「現はされるもの」、「影附けられるもの」は、ノエマに屬することが、明らかに洞見されるのである。然るにさきに述べし如く、質料はノエジスの要素によりて活かされ、「解釋」、「意義給附」(我々が反省に於て、質料に就て又之を以て立てる處の)を受けるものである。かくて當に質料的要素のみならず、夫れを活かす解釋も亦體驗的現實的成分に屬するのである。

併し質料的成分とノエジスの成分との現實的體驗統一は、ノエマの成分の「夫れに於て意識されたる統一」とは、全く異なるもの、更に其の統一は其等の總ての現實的成分を、其等の成分を通じて、又其等の成分の中に於て、ノエマとして意識に現はれ来るものと結合する統一とも、全く異なるものである。質料的體驗に「基づき」、ノエジスの機能を通じて、先驗的に構成されたるものは、即ち「與へられたるもの」であり、そうして我々が純粹直覺に於て、體驗及び其のノエマ的に意識されたるものを誠實に記述する時には、夫れは明證的に與へられたるものである。併し夫れは其の現實的成分とは全く異なる意味にて、體驗に屬するものである。

現象學的還元の稱呼及び同様に、「先驗的なるもの」としての純粹體驗領域の稱呼は、我々は此の還元に於て、質料及びノエジスの諸形式の一の絶對的範域(意識其物に對立するもの、之れと根本的に異なるもの、非現實的なるもの、超越的なるものである處の、これこれに與へられたる一の被規定物或は規定可能物の此の驚く可き覺識は、内在的本質必然性に從ふて、其等の質料及びノエジスの諸形式の、明確なる組み合せに從屬するのである)を見出すと云ふことを、及び此處に、超越的なるものも客觀的に妥當する認識の本質及び可能に關する、最深なる認識問題の唯一の考へ得られる解決に對する源泉が存すると云ふことに基いて、作られたるものである。「先驗的還元は現實に關して判斷抑制を行なふ。併し諸ノエマ(彼等自身の間に存するノエマ的統一を合せて)、及び夫れと共に、實在的なるものが意識其物に於て意識され、特に與へられて居る仕方、

先驗的還元が現實から保留する處のものに屬するのである。そうして此處には只本質的な、かくて無制約的に必然的な結合のみが取扱はれると云ふ認識は、ノエジス的なものとノエマ的なものとの間、意識體驗と意識相關者との間に存する本質關係と云ふ、一の廣大なる分野を、研究の爲めに開示するのである。但し意識相關者と云ふ本質稱號は、あるがまゝの意識對象及び同時に意味性或は所與性のノエマ的仕方の諸形式を包含するのである。

却說ノエマとノエジスとの關係に就て、上に論述せしことから察知し得られると思はれるが、ノエマの本質はノエジス意識の本質を指示し或は暗示し、兩者は本質的に相屬するものである。

併し夫れに拘らず、ノエマは夫れ自身に於て考察し得られ、他の諸ノエマと比較し得られ、其の可能的諸形成に従ふて考究し得られる。かくて吾人は諸ノエマの一般的及び純正的形式論なるものを考案し得る。そうして之れと相關的に、具體的ノエジス體驗（其の質料的成分及び特殊的にノエジス的な成分を合せて）の一般的及び純正的形式論が對立するであらう。

我々は具體的ノエジス體驗（其の質料的要素を含める體驗）と、純粹ノエジス（ノエジス諸要素の純粹な複合として）との差別によく注目し、又完全ノエマと、例へば知覺の場合に於ては「あるがまゝの顯現する對象」との差別に、よく注目せねばならぬ。そうして此の對象及び其の一切の對象的「賓位」を考察すると、此の對象及び此等の賓位は確かに、構成する意識體驗（具體的ノエジス）の多様に對立する統一である。併し此等のものは又ノエマ的多様の統一である。此の事は、ノエマ的「對象」のノエマ的特性附けを考察に入れると、直ちに認識される。かくて例へば顯現する色は、ノエジス多様に對立する、殊にノエジス的把握諸特性の多様に對立する一の統一である。併し更に詳しく考究すると、其等の諸特性の一切の變化に對應し、之れと平行するノエマ的諸特性の變化の存立するを見る。かくて一般的には、ノエマ的諸特性附けに於て、ノエジス的諸特性附けが反映されて居るのである。そうして此の事は、單に知覺領域だけに限りて行はれて居るのでなく、あらゆる意識種類に於て行

はれて居る。かくて我々は幾多のノエジスの諸特性を有する種々なる意識種類を順次に分析し、之をノエジスのノエマ的平行に従ふて探究せんとするのである。

今我々は先づ種々なる表象—知覺、記憶、形像表象等の諸ノエマの比較によりて生ずる處の「對象的意義」に就て考察するが、此の場合に同一的なものは、知覺に於ては原本的に意識され、記憶に於ては記憶的に、形像表象に於ては形象的に意識されて居る。併し夫れによりて我々が體驗及び其の現實的成分を注視する場合に見出される處の、「あるがまゝ」に顯現するもの」に於ける諸特性が表示されるのでなく、我々がノエマ的相關者を注視する場合に見出される處の、「あるがまゝ」に顯現するもの」に於ける諸特性が表示されて居るのである。換言すれば夫れによりてノエジスの要素の意味に於ける「意識の仕方或は様式」が言ひ表はされて居るのでなく、意識されたものの其物があるがまゝに與へられる仕方或は様式が、言ひ表はされて居るのである。そうして詳しく分析すると其等の諸特性或は表象變化は、幾多の列或は定型に屬するものであることが認識される。（方に於ては卒直復現的變化或は卒直現在化は、其特有の仕方にて他のものゝ變化として與へられ居る。他方記號表象によりて與へられる。但し此等の何れの定型に於ても、ノエマ的特性は常にノエジス的特性と平行的に對立して居る。）然るに其等の特性或は表象變化の諸定型は、何れも益々新しき階段に進む階段構成を有するものにして、かくてノエジス及びノエマに於ける諸志向は、階段的に相互に重なる、或は特異なる仕方にて相互に重箱的となるのである。そうし

てノエジスに於ける階段構成に對應して、ノエマに於ける段階構成が成立する。併し一定の仕方にて前者は後者を貫通するのである。換言すればノエマ的志向性はノエジ斯的志向性に對立するが、後者は前者を其の意識相關者として、夫れ自身の中に運載し、そうして其の志向性は一定の仕方にてノエマ的志向性の線を貫通するのである。

然るに右に述べしが如き諸特性とは、根本的に異なる類に屬する諸特性がある。夫れはノエジスの方面に於ける信仰的諸特性或は諸様式、及びノエマの方面に於て之れと對應する實在的諸特性或は諸様式である。信仰的諸特性とは例へば確實信仰、豫期、推測、質問、懷疑等の如きものにして、實在的諸特性或は諸様式とは、右に對應する現實的なもの、可能的なもの、蓋然的なもの、問題的なもの、疑はしきもの等の如きものである。そうして信仰的諸様式に於ては確實信仰は原形式にして、原信仰とも稱せらる可く、他の諸様式は其の變化或は變容と見做される可きである。又之れに對應して、實在的諸特性に於ては卒直なる實在性（ノエマ的に「確實に」或は「現實に」とあるとしての特性）は一切の實在的諸様式の原形式にして、他の諸様式は其の變化或は變容と見做さる可きである。そうして各體驗は、其の諸ノエジスによりて、「あるがまゝの志向的事物」に於て構成せられる一切のノエマ的諸要素に關して、原信仰の意味にて信仰意識として作用するのである。換言すれば新しきノエジス諸特性の各出現、或は古きノエジス諸特性の各變化は、常に新しきノエマ的

諸特性を構成するのみならず、更に夫によりて自^{オナツ}から意識に對して、新しき實在的事物が構成されるのである。

此の事は肯定及び否定を、其のノエマ的相關者と共に考察すれば明らかに理解される。各否定は或物の否定にして、此の或物は或信仰様式を指示する。かくてノエジス的には否定は或「設定」の「變化」である。そうして否定の新しきノエマ的作業は對應する設定的諸特性の「削除」である。其の特殊的相關者は削除特性である。要するに卒直なる實在意識が、對應する否定意識に轉化することによりて、ノエマに於ては「有」と云ふ卒直なる特性から「非有」と云ふ特性が生まれるのである。肯定に就てはまさしく其の正反對が云ひ表はされる。否定は削除するものならば、肯定は裏書きするものである。肯定は否定の如く設定を廢棄するのでなく、之を含意的に強め、確かめる、そうして又削除諸變化と平行する、ノエマ的諸變化の一系列を與へるのである。尚ほ右の事項に基いて考察を進めて行くと、我々は左の洞見に達する。即ち各否定されるもの及び肯定されるものは、夫れ自身一の實在的事物であるから、夫れは實在様式に於て意識される總てのものゝ如く、肯定され又は否定され得る。かくて各歩に於て新に成就される實在構成によりて、繰り返される諸變化の觀念的に無限なる鎖が生ずるのである。

信仰範域に結び附けらる可き諸變化の中で、尙ほ特に注意す可き甚だ重要なものが一つある。其の變化は、夫れが結び附けられる各信仰の様式を、一定の仕方^{カタ}に於て全く廢止し、全く無效力とするが、併し夫れは否定とは全く異なる意味に於てある。其の變化は否定の如く削除するのでなく、つまり全く何事をも「作業」しないので、一切の作業の意識的反面である、約言すれば作業の中性化 *Neutralisierung* である。それで我々は此の變化を中性變化 (*die Neutralisations-modifikation*) と稱し、又其の場合の意識を中性化されたる意識と云ふ。此の變化は總ての「作業

を差し控へたること」、「之を働きの外に置くこと」、「之を括弧すること」、「之を決定せずに置くこと」、「作業中に考へ沈むこと」、或は「爲されたものを只考えるだけで之れと協同しないこと」等の中に含まれて居るのである。「決定せずに置くこと」から一切の意志的なものを絶縁し、更に之を疑はしきものゝ意味、或は假說的なるものゝ意味にも解しないときにも、其處に一定の「決定されなかつたもの」が残存する、一層適當に云へば、「現實」に其處に存立するとして意識されない或物が「其處に存立する」。此處には設定特性は全く無力となつて居る。此處には信仰は最早眞劍には全く信仰でなく、推測は眞劍には推測でなく、否定は眞劍には否定でない。夫れは中性化されたる信仰、推測、否定等である。そうして其の相關者は、變化されない體驗の相關者を反復するが、併し根本的に異なる仕方に於てある、即ち「現實的」の様式に於て意識されるのではなく、「單に考へられたるもの」、「單なる考へ」として意識されるのである。卒直設定、中性化されない設定は、相關的成果として總て「實在する」として特質附けられる「命題」を有する。可能性、蓋然性、疑問性、否定及び肯定等は、總て夫れ自身「實在する」或物である。然るに中性化されたる設定は、左の事項によりて之れと本質的に區別される。即ち其の相關者は設定し得られる何物をも、現實的に斷定し得られる何物をも含まず、そうして中性的意識は其の意識されたるものに對して、如何なる關係に於ても、「信仰」の役目を演じないこと云ふこと。

(フツサル氏は夫より中性變化、中性化されたる意識)

に就て詳しく論述し、夫れと想像との類似及び詳細なる區別を研究して、其の特質を深く究明し、更に夫れと現實的及び可能的設定 (Aktuelle und Potentielle Setzungen) との關係を詳しく論究して、意識一般の本質に就て深く究明して居るが、此處には只同氏が意識の二定型として立つた設定的意識 (Positionales Bewusstsein) と性的意識 (Neutrales Bewusstsein) との區別に就て少しく述べるに止める。(二)

夫れ意識は一般的に二つの定型を有する。一は現實的又は可能的に設定する設定的意識にして、二は中性的意識である。前者は其の信仰的可能性が現實的に設定する信仰的作用に到達すると云ふことによりて特質附けられ、後者は只かゝる作用の陰影形象、かゝる作用の中性變化を生起せしめるだけであると云ふこと、即ち夫は其のノエマ的方面に於て、信仰的に把握し得られる何物をも保有しないと云ふこと、或は夫れは全く現實的ノエマを保有せず、只かゝるものの對象を保有するだけであると云ふことによりて、特質附けられるのである。設定性と中性との區別は、單に信仰設定に關する特有性、信仰變化の單なる仕方或は種類を表示するだけのものでない、かくて一の原様式、精密な意味に於ける信仰の志向的變形を表示するものである。夫れは實に一の普遍的なる意識區別にして、吾人の分析的研究に於ける正常なる理由からして、信仰的「我思ふ」の狭き範圍内に於て特に指示されたる、設定的(現實的)信仰と其の中性的反面(單なる「考へること」)との間の區別に附着して、現はれるものである。そうして信仰的作用諸特性と、他の作用諸特性の一切の種類、かくて一切の意識諸種類一般との間に、甚だ注意すべき又深奥なる本質的交錯が現はれるのである。

ノエジスとノエマとの平行に就て、是れまで論述し來れる事は、主として體驗流の單純なる一下層(比較的)單純に構成されたる諸志向の屬する處の)に關するものである。我々は主として感覺的直觀、殊に顯現する實在の直觀、并に其等の直觀から暗黒化を通じて生起し、自明的に其等の直觀と、類共同性によりて合致する處の、感覺的表象を選んだ。併し同時に其等の直觀及び表象に本質的に屬する一切の現象、かくて最早感覺物を對象としない反省的直觀及び表象一般を

も考察に入れた。そうして我々の結論の妥當の普遍性は、我々が研究を進め來れるが如き仕方にては、研究の範圍を擴張するにつれて自から現はれてくるので、かくて我々は中心の意義中核と、其の周圍に集まる正定的諸特性との一切の區別、并に一切の變化(夫れは現在化、注意、中性化等の變化の如く、特有の仕方にて意義中核を獨むが、しかも其の「同一的なもの」を、其の儘に残して置く)は、繰り返されて現はれることを見るのである。

此處に我々は、表象に於て基礎附けられ、相方共に志向性^二導く二つの異なる方向に従ふて進むことが出来る。一はノエジスの總合への方向にして、二は新しき、併し基礎附けられたる或は建設されたる「設定」の諸種類に導く方向である。先づ第二の方向に就て考へる。

今此の方向をとりて進むと、我々は表象、知覺、記憶、形像表象等に於て基礎附けられ或は建設され、其の構造に於て階段的基礎附けの明白なる差別を示す處の、感ずるノエジス、願望するノエジス、意欲するノエジス等に遭遇する。そうして先づ吾人の興味を惹くは、新しきノエジスの諸要素と共に、其の相關者として新しきノエマの諸要素が現はれることである。又高等階段の各完全體驗は、ノエジスの最低階段に於て見ると同様な構造を、其の完全相關者に於て示して居る。高等階段のノエマに於ても、あるがまゝの評價されたものは、新しき正定的諸特性によりて闕まれたる一の意義中核である。更に此の際、此の新しき特性に關する意識は、一の設定的意識 (ein positionales Bewusstsein) である。尙ほ注意的變化の形式に於て、深奥なる變化の多様性が生起する。そうして此等の複雑なる諸構造を純粹に分析し、完全なる明瞭に持ち出すことは、甚だ困難なる研究である。(フツサール氏は夫れより更に新しきノエジ斯的及びノエマ的意識諸層と、中性化との關係を論究し、又正定 (Tesis) の一般的概念を規定して居るが、此處に其の主旨を簡単に説述することは困難であるから、省略して置く。)

次に第一の方向に従ひ、總合的意識の諸形式を考察する。此處に我々の視界に、志向的結合に

よりて成立する、體驗の種々なる構成様式が現はれ、そうして其等の構成様式は本質諸可能として、一部分は一切の志向的體驗一般に、一部分は其の特殊的諸類の諸特有性に屬する。意識と意識とは常に一般的に結合するだけでなく、相密着する一の意識となる、そうして其の意識の相關者は、相密着せる諸ノエジスの諸ノエマに於て基礎附けられたる、一のノエマである。

(此處に我々の總合と云ふは、一方に於ては原本的時間意識の枠内に於ける諸總合を意味するのではなく、時間其の物、即ち具體的に充實されたる現象學的時間の枠内に於ける諸總合、換言すれば大れ自身に充實されたる現象學的時間に外ならぬ處の體驗流に於ける、持續的諸統一として、進動的諸過程として解せられる其のまゝの諸體驗其物の諸總合を、意味するのである。又他方に於ては確かに其の重要な連續的諸總合、例へば空間物性を構成する一切の意識に本質的に屬するが如き、連續的總合を意味するのではなく、寧ろ調節されたる總合 (die spezifische Synthesen)、かくて分立的に行はれる諸作用が一の調節されたる統一、高等なる階段位の一の總合的作用の統一に結合される特有の仕方或は様式を意味するのである。尚ほ我々は此處に、一定の仕方に於て普遍的なる他の一總合部類を、詳しく考察したいと思ふ。其の部類は結合する (Kolligierende)、選言する (disjunctive)、説明する、結び附ける諸總合、一般的に云へば、其の中に構成される總合的諸對象の諸總形式に従ふて、形式的論理的諸形式を規定する處の、又他方に於てはノエマ的構成物の建設に關して、形式論理學的的文章的意義形式に於て反映する處の、諸總合の一系列を含むのである。)

今調節されたる總合、多元正定的作用 (die polytheische Akte) の總ての種類に對して、先づ左の事項が注目さる可きである。即ち各總合的統一的意識 (多くの特殊の正定及び總合が) は、總合的統一的意識として之れに屬する全體對象を有すると云ふことである。そうして其の對象はつまり、低き又高き諸階段の總合的諸節に志向的に屬する諸對象に對して、其等の諸對象が總て基礎附けの仕方 に於て其の對象に貢獻し、其の對象中に排列される以上、全體對象と稱せられるのである。特異な、限定する各ノエジスは、非獨立なる一層であつても、全體對象の構成に其の持分を貢獻

する。例へば評價の要素は、一の物件意識に於て必然的に基礎附けられて居るから非獨立であるが、しかも對象的價值層を構成するが如くである。又最普遍的意識總合の特に總合的なもの、即ちあるがまゝの總合意識から特に生起する一切の形式、かくて結合諸形式及び諸節其物に附着する總合的諸形式は、かゝる新しき諸層である。

右に述べし如く、總合的意識に於て一の總合的全體對象が構成されるのであるが、併し夫れは一の卒直なる正定^{オビ}の構成されたるものとは全く異なる意味にて、總合的意識に於て對象的である。卒直なる正定の意識は一光線に於て成立するが、總合的意識或は夫れに「於ける」純粹自我は、多光線的に對象的なものゝ上に向けられて居る。かくて總合的集合^{コルレクション}或は結合は、一の「複數」意識である。原始的なる結び附ける意識に於ても、結び附けは全く同様に二重の設定に於て構成される。そうして何處に於ても同様である。

其の本質に於ては原本的には只總合的にのみ意識され得る處の總合的對象の、右の如き多光線的(多元正定的)構成は、左の本質法則的可能性を有するのである。即ち多光線的に意識されたるものが、一光線に於て卒直に意識されたるものに轉化し、前者に於て總合的に構成されたるものが、一の一元正定的「作用」に於て、特殊な意味にて「對象的なもの」とされ得ると云ふことである。

かくて總合的に構成されたる集合は、著しき意味にて對象的となり、夫れは一の卒直なる正定を、同様に原本的に構成されたる集合に結び附けることに於て、かくて一の正定と總合との特有なるノエジュスの繋着に於て、一の卒直なる信仰的正定の對象となるのである。換言すれば複數意識は本質的に、複數意識から一の對象として、個別として多 (die Vielheit) を引き出す處の單一意識に移され得るのである。そして其の多は更に他の諸多及び其の外の對象と、結び附け得られるのである。

右の事態は、結合する或は集合する意識と全く類比的に建設される處の選言する意識、及び其の本體的或はノエマ的相關者に對して、明かに同じである。同様に、結び附ける意識から、總合的原本的に構成されたる結び附きが、一の繋着されたる卒直正定に於て引き出され、著しき意味に於て對象とされ、又其の儘に他の結び附きと比較され、一般的に諸賓位の主位に用ひ得られるのである。併し此の際には、卒直に對象化されたるものと、總合的に統一化されたるものとは、現實に同一であること、及び後に來る正定は、總合的意識から何物をも捏造しないで、夫れが與へる處のものを其の儘に把握するものなることが、明證的に認めらる可きである。

總て正當に總合と稱せられるものは、卒直正定に基いて建設されるので、そうして總合夫れ自身は正定、嚴密に云へば高い階段の正定である。かくて我々がさきに現實性アッファリナート或は現在性と非現實

性或非現在性、及び中性と設定性とに就て論定せることが、其の儘に總合に移して適用されることは、詳しき説明を要せずして明らかに理解されるのである。

併し基礎附ける正定の設定性及び中性が、基礎附けられたる正定の設定性及び中性と、如何に種々なる仕方にて相關係するかを理解するには、稍々詳しき考察を要する。そこでフッサール氏は特に總合の範域に於ける設定性と中性との關係を論述して居る。次に同氏は其等の總合が、言表命題の文章論的諸形式に於て、如何にして言表されるに至るかを考察し、感情範域及び意志範域に於ける信仰的文章構成(信仰的總合を言表するもの)を論述して居る。更に同氏は夫れより、正定及び總合の範域に屬する一般的變化の重要な一部類として、調節されたる總合の完成諸様式を論じて居る。尙は夫れと連結させて、「ローゴス」のノエジスのノエマ的層として意味作用及び意義(Bedeutung und Befugung)を論究して居る。更に論理的表現範域に於ける完成諸様式を考究し、夫れによりてさきに論述せる「明亮化の方法」(die Methode der Klärung)の説明を補充して居る。そうして終りに言表の完全性及び普遍性、并に判斷の表現及び感情ノエマの表現を論じて、以て「ノエジスのノエマ的構造の問題論」を完結して居る。併し其等の諸問題に關するフッサール氏の思想を、此處に其の綱概だけすら説述する紙面を有しないので、乍遺憾總て省略して置き、次號に於て「純正現象學及び現象學的哲學考」の最終篇、「理性と現實」の大要を述べて、以てフッサール氏の現象學論の一般的説述を了り、進んで同氏の社會學論を考究することとする。